

# 彗星だより

前號の本誌第590頁に記したコマス・ソラ氏発見の新彗星(1926 I)については、十一月十五日に中央局たるコペンハーゲン天文臺から二度目の電報が来た。(BULLETIN 第93號。)此の電文は

COMET COMASSOLA PARABOLA  
MAY 14333 06248 05715 02457 17541  
46294 PERIHELION 1927 EBELL  
VINTERHANSEN

さいふのであつて、珍らしく此れは軌道要素を報告してよこしたものである。即ち之れを譯するに

『コマスソラ彗星の軌道は拋物線で、近日點通過は1927年5月14日 333 (萬國時)

近日點の引数は  
62° 48'

昇交點の黃經は  
57 15

軌道面の傾斜角は  
24 57'

但し春分點1926.0 ので近日點の距離は  
1.7541 (天文單位)

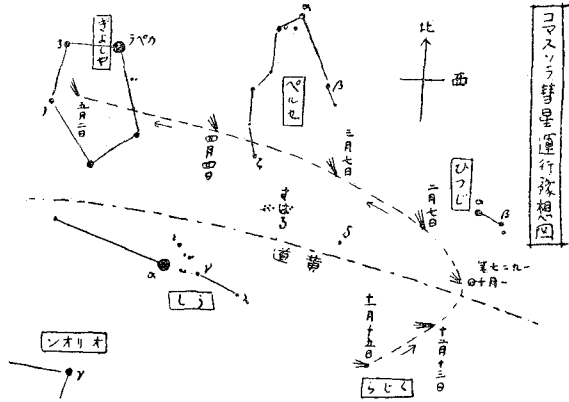
此の軌道要素の計算者は Ebell 氏  
電報發信者はコペンハーゲンのフィンターハンセン氏』

電文中にある検査數46294 はよく合つてゐるから、上記の數値に誤りは無い。

此の軌道要素によつて京都の山本教授が今後の彗星位置を計算した所によるに、(精しくは本會ブレン第93號を見よ)、大體は

日附(萬國時)	赤經	赤緯	光度
1926 年 月 日	h m s		
11 15.5	2 46 8	+ 7°10.2	11.8
12 13.5	2 20 9	+10 0.6	11.6
1927 1 10.5	2 11 55	+14 36.6	11.5
2 7.5	2 28 13	+20 36.5	11.4
3 7.5	3 7 53	+27 25.2	11.3
4 4.5	4 10 47	+34 4.8	11.3
5 2.5	5 36 18	+38 50.0	11.3

さなる。此れを星圖に畫いて見ると、彗星は、1926年の十一月中は、くぢら座の東北部を逆行してゐるが、十二月の初めにひつじ座へ北上し、1927の一月元旦頃に黃道を北へ横切り、同時に毎日の運動は順行に轉じ、其の後は徐々に東北へ進みつゝ、火星のあとを追つて行く筈である。三月十日にはペルセ座に入り、四月中旬には更に進んでぎよしや座に入る。此の期間、常に日没後の西天を賑はすこととなる。地球への距離は十二月十日頃が最近で、其の後は少しづつ遠ざかるけれど、太陽と彗星との距離は五月十四日まで漸次近づく筈であつて、結局、彗星の光輝は五月中旬まで、極めて僅かづつ



ではあるが増して行く。そして近日點通過頃には十一等級ぐらゐになる見込みである。(途中で急變するところが無ければ。)故に10センチ以下の屈折望遠鏡では観測は困難であらうが、反射鏡ならば15センチ以上の口径のもので見える筈。——とにかく、此頃多數の彗星が発見される中にも、近日點通過の日より160日も前に発見されたのは可なり珍しい例である。尤も

1910年のハレイ星が近日點よりも220日前に、

1912年のナルフ彗星は240日前に

1914年のテラヴン彗星は1800日前に

発見されたといふ例が無いではないが、多分此のコマスツラ彗星は1927年の年末頃まで観測されるであらう。

⑤さきに1925kの彗星を発見したザルク氏(ポーランド國クラコキ大學天文臺の)は、去る1923年九月一日21時46分(萬國時)に

赤経  $15^h 53. m 2$  赤緯  $+3^{\circ} 5'$  (1855年の分點)の位置に彗星らしいものを一つ見つけたといふ電報が歐洲の或る天文臺には送られた。星の光度は6.0等だったといひ、又、之れは4分時間に $1^{\circ}$ づつ東へ運動してゐたといふ報告なので、聞いた人は皆驚いたが、其の後何の報告も無いので、多分之れは、何かの誤りか、又は一流星の破片か、或は極光の一片であつたのかも知れない。(ちよ古い話であるが、1916年五月四日にもペライン教授たちが、僅か數時間の間、天に同様な奇怪なものを見たといひ、ミスEグランシーは軌道計算までやつたことがあつたけれど、やはり、誰も其の後之れを見なかつたので、之れが本統の天體であつたか否かは今だに判明しないまゝになつてゐる。)

◎ニウツミン彗星 (1916 II) が近づいて来た筈なので、「今にも誰かに発見されるだらう」と、各國の學者は期待してゐる。此の彗星は1916年二月24日にロシアのニウツミン(Neujmin)氏が発見したもので、同年の六月まで観測が行はれ、其の結果、週期5.42年の彗星であることが知れた。1921年には、地球との位置の都合上、発見されなかつたが、此度は観測に都合悪くないから発見は可能性が多い。東京の神田氏からの報知によれば、近日點通過は多分1927年一月八日らしく其の豫想位置は、去る十一月頃ほし座、同十二月にはおとめ座に入り、1927年一月中、スピカ星の附近を西西南へ順行中である。但し、光度は12等級の程度であるから、60センチ以上の反射鏡で無ければ観望は困難であらう。

◎近着報によればニウツミン彗星は発見された。発見者は又ニウツミン氏、場所はロシア國シメイス天文臺。時は1926年十一月五日1時37.9分(萬國時)。星は赤経 $10^h 10^m 56^s$  赤緯 $+18^{\circ} 29'$  分點1926.0 光度は14.5。但し急激に増光しつつある。近日點通過は1927年一月16.5日(萬國時)に近い。本會アレテン第94號を見られよ。

## 消 息 と 雑 報

○木星の四衛星の變光 米國で天體光度測定の大家 J. Stebbins (ステビンス氏—キスコンシン大學天文臺長)氏が、1926年の夏、カリフォニアのリク天文臺に滞在し、精密な光電光度計(Photoelectric photometer)で観測したところによると、木星の四つのガリレオ衛星は何れも多少の變光星であつて、其の變光週期は公轉週期と等しいものらしい。即ち、

衛星	週 期	變光の範圍
1	1.77 日	0.24 級
2	3.55	0.30

3 7.17 0.13

4 16.75 0.10

又、位相による變光は

第2衛星は 位相角 $1^{\circ}$ につき0.13等級

第3衛星 同 0.13

第4衛星 同 0.25

第1衛星 (観測不充分)

しかるに

我が月は 位相角 $1^{\circ}$ につき0.11等級である。要するに此の四つの衛星は種々の點に於いて月と同様のものらしい。(Pub. A. S. P. 225)